

3. 実践報告・実践研究論文

1年生向けの基礎的なサービスラーニング： 「学問の基礎：人間理解（人を助けることを考える）」の実践報告

—コロナ禍の中での教室外活動に焦点を当てて—

牧田 東一ⁱ

A Practical Report on a Basic Service Learning Course for Freshmen,
"Understanding of Humanities: Cooperation in Human Behavior"

Toichi MAKITA

キーワード：サービスラーニング、初年次教育、リベラルアーツ教育、リフレクション

1. はじめに

大学教育の変革は現在進行中であり、2020年のコロナ禍の中でほとんどの大学がオンライン教育の採用を半ば強制的に実施せざるを得なかったことは、意図的ではないとしても変革を加速化させる要因ともなりうる。本稿では、大学教育改革の一つの焦点であるアクティブラーニングの導入、なかでも最も従来の講義型授業からは振れ幅が大きいサービスラーニングについての授業実践の報告と若干の考察を試みたい。

山田は大学教育の変革には「何を教えるか」から「何が出来るようになるか」という教育活動の中心目標の移行があり、アクティブラーニングが「学生の主体的な学びにつなげるための手法である」と述べ、双方向型のアクティブラーニングが効果的であるという認識が共有されつつあると述べている[山田 2019:59]。

山田はさらに、アクティブラーニング研究の中で明らかになったことは、学生の学習成果は認知面と情緒面に分けられ、アスティンを引用して、二つの側面に基づく学習成果を、学生の内面である心理的側面と態度や行動に現れる行動的側面に分類し、成果を以下のように分類して説明できるとしている[山田 2019:60]。

表1 学習成果の分類

	認知面	情緒面
内面的（心理的）側面	教科・領域別知識、学習能力、批判的思考、基礎学習技術、学習達成度	価値、関心、自己概念、態度、信念、満足度
行動的側面	学位取得、職業	リーダーシップ、市民性、人間関係構築

(山田2019から筆者作成)

ⁱ桜美林大学リベラルアーツ学群 教授

専門分野：国際関係論・国際協力

主な担当科目：「国際理解教育（カンボジア・ストリートチルドレン・ボランティア研修）」「人間理解（人を助けることを考える）」

「国際協力入門（NGO論）」「国際協力論」「国際協力フィールドワーク（日本）」「国際交流論」

3. 実践報告・実践研究論文

このような学習成果についての認識に基づいて、アスティンはアクティブラーニングの研究成果から、①学生の学習や発達は学生自身の関与（involvement）の量と質に比例する、②教育政策、教育実践、教員の学生への関与は学生を関与に導き、成果に繋がるという関与理論をとらえた山田は述べる。また、テレンジャーニが、インターンシップやサービスラーニングのような教室外学習が学生の成長に関係していると示唆していることも紹介している[山田 2019:61-62]。

さらに、従来型の知識伝達型教育では、基礎学力、標準性、知識量、順応性等の能力の獲得が可能であるが、多様性、創造性、チャンレンジ性、個別性、能動性、リーダーシップ性などは限界があり、こうした実践知、応用知の獲得にはアクティブラーニングの親和性が高いとも述べている[山田 2019:63]。

また、アクティブラーニングは、実社会で直面する複雑・多様な正解が一つではない課題に適切に対応できる思考力、創造性および課題探究能力を育成することが目的であり、そのために授業内での討論やディベートとともに、事前事後学習で文章力、表現力、読解力、分析力、思考力と言った基礎的能力の向上も併せて意識すべきだとしている。こうしたアクティブラーニングの一つの手法として体験型学習である、サービスラーニングがあると述べている[山田 2019:63]。

本稿では、表1の分類でいえば、内面的側面の認知面について講義や読書レポート、期末レポート等で大学1年生の基礎的能力の向上を図りつつ、主として内面的側面の情緒面（価値、関心、自己概念、態度、信念、満足度）の学習成果がどのように得られているのか、さらにそこから行動的側面（リーダーシップ、市民性、人間関係構築）にまで至っているかを検討することを企画している。

授業のねらい

本授業が置かれている「学問の基礎：人間理解（人を助けることを考える）」はリベラルアーツ学群の基礎科目であり、選択必修科目の一つでもある。授業の内容は、人間の「助け合う」動物としての性質がどのように作られてきたのかを、遺伝子行動学、動物行動学、家族社会学、文化人類学、経済学、政治学、国際関係論のそれぞれから見て、人間の個人から始まり、家族、狩猟採集集団、農業集団、部族、国家、国際社会と、より大きな集団での「助け合い」の原理を理解することである。

「助け合い」という一つの側面から、多くの学問分野を縦断しながら、人間は多くの場合に「助け合う」ものの、「助け合えない」場合もあり、「助け合い」を促進するためには、どのような原理が重要なのかを見ていく。

サービス活動としては、社会における助け合いとして「ボランティア活動」を取り上げ、全員に20時間の様々な団体でのボランティア活動を通して、社会問題の理解、ボランティアという形の助け合いの意味と限界、行政や企業の社会問題解決への役割、また誰を助けて、誰を助けないのか、という問題への気づきから、国民の助け合いの範囲と程度を決める政治の重要性の認識を図ってきた。大学1年生が、ボランティア活動とそれへの疑問を実際に活動することで深く理解し、それが社会問題の理解と政治の重要性の認識にどこまで繋がり得るのかを探るのが、学生に明示していないが、筆者にとっては、この授業のねらいであった。

また、2020年度はコロナ禍で外部団体でのボランティアが困難になったことから、授業における「家族の助け合いと現代的課題」の部分に焦点を当てて、「家族内ボランティア」と称して家事を10時間活動させた。特に重要なのは、家事分担の不公平と主として分担している人の不公平感にどこまで気づき、それを改善しないと家族が崩壊する危険性をどこまで肌で感じられたかである。家族問題は現代の社会問題の重要な一つであり、学生にとっても極めて身近な「現場」であるが、それに気づけていない学生がほとんどであり、社会問題の「気づき」という面ではよい成果があった。しかし、それから出発してより多くの社会問題にも「気づいていない」ことまで認識が及んだかどうか、重要である。

3. 実践報告・実践研究論文

本稿では、①初年次教育におけるサービスラーニング、②多人数の多層的な気づきのマネジメント、③多数の活動場所での異なる社会体験から多様な学習志向へ、④社会問題への気づきから市民教育への導入、という4つの観点から授業実践をまとめてみたい。

2. 授業の概要

(1) 講義の内容

- 第1回 動物行動学に学ぶ～ダーウィニズム：遺伝子が全てを決めるのか（遺伝子行動学）
- 第2回 動物行動学に学ぶ～動物の「助け合う」行動（遺伝子行動学）
- 第3回 動物行動学に学ぶ～霊長類に見る「助け合い」の特徴と限界（霊長類研究）
- 第4回 家族の助け合い～家族の愛情と子育て（家族社会学）
- 第5回 家族の助け合い～依存、自立、核家族（家族社会学）
- 第6回 コミュニティの助け合い～狩猟、採集（文化人類学）
- 第7回 コミュニティの助け合い～農耕、都市生活（民俗学）
- 第8回 社会の助け合い～分業、会社、貨幣経済（経済学）
- 第9回 社会の助け合い～さまざまな組合（経済学）
- 第10回 社会の助け合い～市民社会（政治学）
- 第11回 国家の助け合い～税、保険、年金（経済学）
- 第12回 国家の助け合い～治安維持、安全保障（国際関係論）
- 第13回 国際社会の助け合い～戦争における同盟（国際関係論）
- 第14回 国際社会の助け合い～人道援助（国際協力論）

授業内容から分かるように、人間の個体から家族、部族、社会、国家、国際社会というようにより大きな集団における助け合いに関わる諸問題を、理系から社会科学の様々な分野の知識を用いて、統一的に理解しようとするものである。このようなアプローチは筆者の専門である国際協力論において既になされているものである。国際協力が行われるのが、理想ではあるが現実には容易ではないこと、またどのような条件のときに可能であったり、困難であったりするのかを考究するために考えられてきた。

人間の助け合い＝協力は、それが生き残りに有利であるために、そのような特性を持った個体、種が生き残ってきたという考え方であるが、常に助け合う訳ではなく、時には殺し合うことが起きるのは、「囚人のジレンマ」によるものである。ゲーム理論で用いられる「囚人のジレンマ」は、助け合うことから得られる利益よりも、相手を騙して自分は協力せずに相手だけに協力させる方が利益が大きいことから、互いに相手の裏切りを考えると助け合わない方が利益が大きくなってしまふことを言う[ドーキンス 2006; 安藤 2012]。

ゲーム理論では無限回ゲームにおけるしっぺ返し戦略によって、協力ゲームが成立するとする。同じ相手と無限回ゲームをする場合には、最初は協力し、相手も協力し続ける限り協力し、相手が裏切った場合には1回だけしっぺ返し（報復する）するという戦略が最も利益が大きくなることが分かっている。そこから、同じ相手と長期に亘って協力ゲームをする場合には、裏切りには一定の報復をすることで、協力し合う集団が成立し、この集団は遺伝的に安定である、すなわち淘汰されずに生き残るとされている。ここから群れを作り、その中では協力しあうが、群れの外とは協力しないという国家間の対立の原因にまでつながる、協力の基本が見える[アクセルロッド 1998]。

霊長類研究からは、協力をするためには群れを作り、階層を作ること、長期的な互酬性、異なる形の見返り、食料の分配の公平性、共感、弱者の同盟、公平な第三者の重要性など、人間社会の協力の

3. 実践報告・実践研究論文

法則につながる様々な事象を学ぶことが出来る[ヴァール 1998,2010]。

人間の助け合いの基本は長期に亘る子育てのための家族の助け合いであることから、家族の根幹である夫婦の助け合い、また男女の性役割分業などに始まり、大家族での子育てから核家族化による女性一人での子育ての困難、女性も平等に教育を受け就業するなかで家庭内の性役割分業の見直しの必要性、またパラサイトや家庭内暴力などの夫婦・親子関係の現代的問題について学ぶ。これから家族を形成する大学生にとって非常に身近で重要なテーマを助け合いの観点から学ぶことになる[小原 2017; 柏木 1998,2010]。

採集狩猟民の助け合いは主として食糧確保のための数家族から数十家族の助け合いであり、そこでは参加者への平等な配分、狩猟時の役割分業、男女の分業、農耕民等の他部族との物々交換などの現代社会の協力の原像を見る。農業における助け合いでは、隣近所の農作業の助け合いから村単位の助け合い、男女の分業、子どもの手助け、村の掟と罰などを学ぶ。ここでは文化人類学や民俗学の記録ビデオを見て、食料を得るための協力を理解させた。

経済学の初歩からは、貨幣を用いてのものやサービスの交換により非常に広範囲の人々が助け合うようになったこと、質や生産性の向上のために分業が発達したことによって、多くの人々が豊かに安全に生活できるようになったことと[岩井 1998; 内山 1997]、一方で分業の結果、平等な分配ではなく格差の問題が出てきたことなどを学ぶ。そうした資本主義の負の側面を是正するために、労働組合や生活協同組合などの組合活動が盛んになり、一定の役割を果たしていることも併せて学ぶ[熊沢 2013; オルニィ 1999]。

こうした貨幣を媒介とする助け合いの輪から排除される貧困層や社会的弱者を助け合うものとしてのNGO/NPOに代表される市民社会の助け合いと、その一部をなすボランティアや寄付がどのような動機で可能になるのかを学ぶ[田村 2009; 川口 2005]。そこでは他者の苦しみへの共感、社会からの高い評価、災害支援の場合は自分もいつか助けられる立場になるかも知れないという長期的互酬性などの原理を学ぶことになる。

国家レベルの助け合いでは、法に基づいて公平に強制力をもった助け合いが行われ、税金や年金、健康保険等の強制的徴収での「公平」負担と、議会での話し合いによる歳出の決定に基づいて社会福祉が行われることで、国民レベルでの助け合いが行われていることを知る[諸富 2013]。強制的な徴収、また歳出の支出先と支出レベルの決定は全て選挙で選ばれた国民の代表である代議員による話し合いで決まる、すなわち政治によって決まるため、最低限の政治参加である投票の重要性を学ぶ。一方で、投票率の低さ、党派政治の問題、官僚機構の前例主義や腐敗の危険性、少数者の声が届きにくいなど、代議制民主主義の課題も学び、国家が万能ではないため、小さいニーズに素早く柔軟に対応できる市民社会による助け合いも必要であることを学ぶ。

最後に、国際社会では他国の国民と日常的なつながりがないこと、言語の壁によるコミュニケーションの困難、価値観や社会制度などの違いなどから、国内のように協力は容易ではないこと、しばしば国際社会全体の利益ではなく、各国家の国益が優先され、対立や戦争が起きてきたことなども学ぶ。国家間では強国に対するには、弱者の同盟が行われることや、大国の利益が優先されがちではあるが、外交によって小国も国益を一定程度は守れることなどの国際政治の基本を学ぶ。さらに、国連等の超国家機関、国際法、経済的相互依存などの国際協力を進める諸制度が徐々にではあるが作られてきていること、また災害や貧困などの諸問題に現実に国際協力が行われていることも学ぶ[牧田 2012]。

3. 実践報告・実践研究論文

(2) 受講生

表1 学問の基礎（人間理解：人を助けることを考える）の年度別男女別受講生数

	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
女性	16	14 (6)	21 (1)	20 (1)	35 (2)
男性	10	12 (3)	12 (1)	9 (1)	22 (4)
合計	26	26 (9)	33 (2)	29 (2)	57 (6)

() 内は、1年生以外の受講生数。

表1の通り、5年間の合計では171名の受講があり、うち女性は106名、男性65名となっており、1年生が152名、1年生以外は19名となっている。表には載っていないが、リベラルアーツ学群（以下、LA）生以外は3名であり、圧倒的にLAの1年生が多いことが分かる。

どのような学生が受講しているのか、経験による定性的な描写となるが、授業内容に含まれるボランティア活動に惹かれてくる学生が、おそらく4分3程度を占めている。キリスト教系大学の特性かもしれないが、一定程度こうした学生がいることは事実である。残りの学生は、時間割上の都合からサービスラーニング科目であることを理解せずに受講し、第1回授業での説明を受けてもお残った学生である。第1回授業ではボランティアにおける心得（連絡なしの欠席は不可であること、礼儀、自ら積極的に動くこと等）を説明し、決して楽な科目ではないことを強く伝える。そのため、10名程度は別の科目に移るが、残る学生もいる。

2020年度の受講生が多いのは、コロナ禍の中でボランティア活動ができないかも知れないことをシラバスや第1回授業で明示したためではないかと思われる。実際には、各自の家庭でのボランティア活動を義務付けたのであるが、詳細は後に述べる。

ボランティア活動に熱心な学生が、必ずしもこの授業のターゲットではない。人間における「助け合い」を幅広く理解することが目的であり、ボランティアの意義については含まれるが、他方でその限界についても理解を求めている。また、何らかの長期的な互酬性の上に成り立ち、またしばしば非物質的な見返りがあることを述べる。ボランティア活動を無条件に良いことと考える学生は、しばしば「見返りのない支援はないのか」と質問をする。そうした関係には持続性がなかったり、あるいは依存的関係となり自立した人間同士の対等の関係を阻害し良いとは言えないと答えるが、完全に理解する学生ばかりではない。

サービスラーニングとしては、受講生の数が20名を超える点が重要になる。このことは、受講生のボランティア活動が複数の引受先になることを意味しており、ボランティア活動のマネジメントと授業内での振り返りが複雑になるからである。そこで、次に受講生の授業内ボランティア活動（授業外活動）について概略を述べる。

(3) ボランティア活動先

ボランティア活動先は以下の通りである。

A. 教員が用意した団体

- a. 大学近隣の高齢者福祉施設、認知症高齢者施設、障がい者施設
- b. 大和市・横浜市の外国人の子どもの学習支援団体
- c. 山谷と寿町のホームレス支援団体

- a. 近隣施設は大学の地域連携室の協力を得て、大学あるいは淵野辺駅から徒歩圏の学生ボラン

3. 実践報告・実践研究論文

ティア受け入れ施設をピックアップし、教員と連携室職員で訪問して授業内容を説明し、学生ボランティアの受け入れを依頼した。これらの施設でのボランティアは学生が授業の合間にすることが可能であり、その意味では活動しやすい団体である。特に特定の活動に強い興味がない学生が選択することが多い。

b.は、大和市、横浜市にある外国人の子どもの学習支援団体で、当初は2団体、後に1団体を追加した。子ども支援は学生に人気のある活動であり、その点では活動の内容に興味のある女子学生が選ぶことが多い。

c.は、教員自身の関わりと同僚教員の協力を得て、学生1～2名程度が参加するものである。ボランティア活動の体験としては、日常生活との落差が大きく、ハードルは高いが学生へのインパクトは大きい。

B. 学生が捜してきた類似団体

各年度数名が、それまで自分が活動してきた団体、あるいは自宅近くの団体を探してきた。活動の内容は冒険遊び場、障がい者スポーツ、子ども食堂などである。

<活動団体の選定>

授業の内容が「助け合い」という広い内容で、ボランティアの活動内容には限定が特にないという前提ではあるが、学生の関心や都合は多様であるため多人数の学生の活動を可能にするためには、なるべく多くの活動団体を用意することと、それらではうまく活動出来ない学生には自分の興味と都合で探すことを認めなければならない。多くの団体で学生が活動することになると、それぞれの体験内容が異なってくるため、振り返りを工夫しなければならない。特にボランティア活動にさほど前向きではない学生のために、比較的負担が少ない活動を用意することも必要になる。実際には決して軽い負担ではないが、一旦始めると活動の楽しさを感じるようになるため、受講するかどうかを決める段階で学生に負担感を持たせないことが重要と思われる。

<団体と学生の希望のマッチング>

引き受け団体の学生ボランティア引き受けの可能人数は1名～10名くらいまで幅があり、平日昼間のみや、土日限定や、金曜日の午前中のみなど引き受け可能な曜日・時間帯は様々である。また、1年生がほとんどで必修科目が多いことやアルバイト、部活などで学生も多忙であり、通学時間も様々である。第1回で教員が用意した団体については、曜日・時間帯等を示して、ボランティアが可能かどうかを履修条件としているが、安易に考えて都合があう団体を見つけれない学生、自分で探すつもりが容易に見つからない学生、1回ボランティアに行ってみたものの務まらないと判断して、活動団体を変更したいとする学生など、マッチングは容易ではない。大人数の学生を引き受けていただける団体では、シフト表を作成して調整するが、学生の希望が重なる場合もある。このようなマッチングのために、4月の3～4回の授業で時間をかける必要があり、実際の活動は5月のGW明けになる。このマッチングをどのように効率的に行えるかが、多人数受講生の場合の一つの課題である。

<学生活動のモニタリングと情報面でのサポート>

複数（しばしば多数）の団体に数名ずつが活動している状況では、教員が学生の活動を直にモニタリングすることは難しい。この授業では、最初の段階でいくつかの団体には学生を伴うことがあるが、それ以降は、ほぼ学生が授業の際に提出する毎回の活動記録を通して、どのような活動をしているのか、また何らかの問題を感じていないかなどをモニターしてきた。また、活動団体とはメールや電話で繋がっており、団体側から何らかの苦情があった場合には、メールや授業で学生に連絡し

3. 実践報告・実践研究論文

たり、必要な場合には注意できるようにしている。実際に、苦情が出るケースは多くはなく、2016～2019年度の4年間で1名であった。

学生が活動に疑問を感じたり、何をしたらいいのかわからないというような状況は、後に述べる振り返りの中で出されたりするが、それは学生間の情報交換で疑問が解かれる場合も多く、また授業後に質問に来たりするが、事情を知らないだけのことが多く、説明すれば納得する。学生の情報不足による疑問を早期に解消することは、学生の活動をスムーズにし引受先との関係を良好に保つためにも必要である。

さらに、ボランティアが始まった段階で活動に関連する参考文献の読書レポートを課している。教員が用意した参考文献リストから選んだり、自ら探した文献を読むことで、支援対象の人々が置かれている状況やハンディの実情を知ることが、活動の意義を理解する上で必須であり、授業内ではカバーしきれない社会的弱者について知識を持って理解することが、「共感」という社会レベルでの助け合いには必要であることの理解にもつながる。

<振り返り>

多くの受講生がボランティア活動を始めたところで（おおよそ第6回以降）、授業内で30分程度を使って、以下のような形でボランティアの振り返りを行う。

第1フェーズ（2回程度）：同じ団体に行っている学生を小グループとして、グループ内で活動をして感じたこと、気づきや学びについてシェアリングをする。この段階での振り返りは、活動の内容や疑問点などについて情報交換を行い、個人個人では気づけない点などを共有して、それ以降の活動を円滑にする目的である。小グループでのシェアリングの後、全体報告をグループ代表にしてもらう。この狙いは、受講生全体がどのようなボランティア活動をしているのかの全体像をシェアすることである。発表者は交代制として、意見や気づきをまとめて全体に向けて発表する訓練でもある。この段階では、まだボランティア活動の経験が十分ではないので、誤解や的外れな疑問なども出てくるので、教員はその都度、情報を提供して事実誤認や認識の歪みを訂正する。

第2フェーズ（2回程度）：同種類の活動（高齢者福祉、障がい者、外国人の子ども支援、ホームレス支援など）のグループを作り、異なる団体での活動についてシェアリングを行う。例えば、障がい者施設といっても、軽度と重度の違い、身体障がい・知的障がい・精神障がいの違い、提供するサービスの性質の違い（通所と入所施設、就労支援など）など多種多様であり、一つの施設での経験に限定されてしまうと、学生の視野が狭くなり誤解や固定概念につながる危険性があるため、一つの社会問題であっても問題と支援の多様性を理解するためである。

第3フェーズ（2回程度）：ボランティア活動をしていて、嬉しかったこと、楽しかったこと、やって良かったと思ったことなどを活動の種類をバラバラにしたグループでシェアリングをさせる。支援対象者とのコミュニケーションがうまく行って、話しがはずんだり、有難うと言われたり、また来て欲しいと言われたり、偉いねと褒められたり、精神的な喜びや楽しさなどが無償の行為への非金銭的・感情的な見返りであることを言語化して感じさせる。また、今まで知らなかった世界が広がる、知識が増えるなどの知的好奇心を満たすことの楽しさもよく言われる感想である。さらに、自分が道徳的に良い行為をしている、自分のしたことが評価されている、自分の存在を喜ぶ人がいる、という自尊感情の高まりも見られる。次のフェーズでは否定的側面を考えさせるため、この段階ではボランティアの肯定的側面について、受講生に強く認識、確認させることが重要である。この段階では、講義で助け合いの基本である「共感」や「感情移入」などを取り上げてあり、講義内容の実体験を通しての深い納得を意図している。

第4フェーズ（2回程度）：ボランティア活動をしていて、嫌だなとか、億劫だななどのネガティブな感情を持ったことについて、活動の種類をばらばらにしたグループ内でシェアをする。様々な意見

3. 実践報告・実践研究論文

が出るが、大きく分けると以下の4種類程度に分けられる。①支援している対象の人とコミュニケーションがうまく取れない場合（認知症の人が覚えてくれない、奇声を発する障がい者に恐怖を感じる、など）、②ボランティアで支援する意味がよく分からない場合（外国人の子どもが日本語が話せて日本人と変わらないように見える、高齢者通所施設ですることが見つからない、など）、③無償の行為（交通費がかかる場合もある）にかかる時間にアルバイトをすればお金が入るのにとってしまう、④団体のスタッフとコミュニケーションがうまくとれず、団体の目的や決まり事に疑問を抱いた場合、などである。

①②については、支援対象者の状況やニーズが見えていないことが大きな原因であり、上述の参考文献を読んだり、自分自身の経験値が上がり、また他の受講生の意見や情報から知識が増えると解決されていくことである。教員はアドバイスしたり、参考文献だけでなくさらなる知識の必要性を強調して、自分で調べるように指導を行う。③④は、ボランティア活動の根本的な課題に関することである。③は何故ボランティアが必要なのかという考察に導くこととして、団体の有給スタッフに目を向けさせ（いない場合もある）、その給与はどこから来るのかを考えさせる。ボランティアに頼らざるを得ないニーズがあるにも関わらず、公的な支援がないのは何故かという問題意識につなげる。④は、支援のあり方についての考察や分析へと向かうように指導をする。この段階では、講義では社会レベルの助け合い（NGO・NPO）の部分のカバーしており、講義の内容を受講生が体験を通じて理解し、また講義が体験での疑問を解くのを助けることが意図されている。

第5フェーズ（2回程度）：最後の振り返りでは、それぞれのボランティアが最終的な段階に入っており、受講生全体での体験の共有も進んでいるという前提の上で、国や自治体の支援が入っている高齢者・障がい者の問題に対して、それがほとんどないホームレスや外国人の子どもの違いが何故生じるのかを考察させる。既に、参考文献等でこうした支援の格差について知識を持っている学生もいて、ほとんどの人がなる高齢者の問題、誰もがある種の確率で陥る危険性のある障がい者に対しては、国民の合意が形成されやすく、そのため国民の助け合いである税や保険料などによる国民全員の助け合いの対象となるが、絶対的なマイノリティであり、国民の多くが自分はそうなる可能性があるとは考えないホームレスや外国人の場合には国民的合意が得られないことを理解させる。また後者が選挙権を持たない人々であり、彼らの人権は保障されないことに気づかせる。しかしながら、ボランティア活動を通して彼らと直接接してみれば、彼らが国民的支援の対象とならないことは不条理であり、よく考えれば、国民の多くもホームレスになる危険性があり、海外に移住すれば同じ立場になることに考えを及ぼせる。マイノリティの支援はより想像力をもった互酬性の認識が必要であり、また国民的支援の実現にはマイノリティの声を政治に反映させることでしか実現しないことも理解させる。政治を動かすためには、参政権を持たない人々を代弁して、マイノリティの社会問題を認知した人が政治参加して声を上げる必要があり、マスメディアやNPO/NGOのアドボカシー活動の重要性まで理解を繋げさせることを意図している。

<評価>

評価は3つの尺度を用いている。①授業への参加：出席、振り返りでの発言、教室外活動であるボランティア活動への参加である。活動時間が20時間に満たない場合は不可となり、遅刻や無断欠席などが引き受け団体から苦情として出た場合には、学期途中でも注意するだけでなく、これまでは事例はないが、活動中止を告げることもあり得る。4年間の実績ではほとんどの学生が参加を果たしているが、途中から履修放棄とも思える学生も数名出ている。受講生の9割以上は、この尺度ではほとんど差がつかない。②授業後の小テスト：毎回、授業内容の理解を確認する小テストを行う。50点満点で、平均45点程度となる（2019年度は43.34）。③読書レポート：各自のボランティア活動の対象に関連する参考文献を1冊読んで、内容をまとめるだけでなく、活動での疑問や気づきとの関連を発見

3. 実践報告・実践研究論文

したかどうかを書かせる。50点満点であるが、平均は45点程度となる（2019年度は46.18）。④期末レポート：「ボランティアで学んだこと、気づいたこと」と「自分についてと思う力」の2つの設問に自由回答をさせている。前者で多い回答は、「支援を受ける対象の人々が自分と同じ人間なんだと気付いた」「自分の中にあった偏見」「コミュニケーションの重要性和どんな人ともコミュニケーションが出来ること」「挨拶や笑顔の重要性」「自分から動くことの大切さ」「ボランティアで知らない世界を知る楽しさ」「支援の必要性を多くの人に知らせる必要性」などである。後者では、「コミュニケーション力」「気遣う力」「話しかける勇氣」「行動力」「観察力」「先を見据えての計画力」「調べる力」「積極性」「ポジティブな心」などをあげている。期末レポートでは、講義で習った知識、参考文献などから自分で調べた知識と現場での体験を結び付けられるかどうか、を重視して評価している。現場で抱いた疑問を自分で進んで調べたかどうか、参考文献などの知識を現場体験と重ねることで深く理解できたかどうか、文献の知識と現場の実情の違いを見つけられたかどうか、である。

以上の尺度で、②を50%、③を25%、④を25%として評価を行ってきた。①は成績が付く前提条件であり、満たさなければFとなる。相対評価で行うが、2019年度でみるとAが13名、Bが4名、Cが10名、Dが1名、Fが1名となっており、通常の講義科目よりはAの割合が高くなっている。現在の成績のつけ方ではAとBの区別がつきにくく、AとBの人数が規定（Aが受講生の10%、Bが30%）とは逆になってしまう。

3. 考察

(1)リベラルアーツにおける初年次教育サービスラーニングの視点

「学問の基礎」の意味付け

本科目は、リベラルアーツの初年次教育に選択必修としておかれた「学問の基礎」の多数のプログラムの一つである。芳沢は「ある物事に対して、多様な角度から検討し、様々な視点から出される意見を聞き、考えていくということはリベラルアーツの基本的な考え方です。」と述べ、「学問の基礎」はリベラルアーツにとって重要な科目だとしている[芳沢 2018:25]。

さらに言えば、自然科学から社会人文科学までの学際的な思考こそがリベラルアーツの学びであることから、これを教員自らが示すことが「学問の基礎」の本旨であると筆者は考える。そこで、筆者の専門である国際協力の根本的な基礎である「人が助け合う行為」を自然科学から社会科学につなげてみていくのが本科目の狙いである。事実、現実の国際協力の現場で働く人々には理系の技術者（工学系、農学系、地震や気象学など）が多く、他方、国際協力の枠組みを作っているのは経済学や国際法、外交などの社会科学の専門家である。国際協力は現実に関わる問題を解決することが目的であり、そこには自然科学的、技術的なアプローチ、経済学や法学などの様々なアプローチが折り重なっている。国際協力は社会工学であるという言葉があるように、段階ごとに外交、経済、国際法、技術などの異なる専門家の出番がある。しかし、決定的に重要なのは協力するのか、しないのかの決定であり、本科目で取り上げている「人間の助け合い」の本質を理解することが極めて重要である。そこで重要になるのは苦悩への「共感」であり、困ったときは「お互い様」という長期的な互酬性であり、援助依存を生まない自立のための支援である。また、支援する側の道徳的価値ではなく、支援を受ける側の状況の改善が本質であり、支援の方法の改善が国際協力をめぐる問いの全てである。求められるのは、人助けをするいい人ではなく、持続性のある問題解決に取り組むクールな問題分析と実現可能性の理解が出来る人間なのである。以上のような国際協力の特徴から、本科目は組み立てられている。

3. 実践報告・実践研究論文

初年次教育におけるアクティブラーニング

初年次教育におけるサービスマーケティングの位置づけについての先行研究は見当たらないが、サービスマーケティングはアクティブラーニングの一種であり、初年次教育におけるアクティブラーニングについては多く言及されているため、それを手掛かりに考えてみたい。

2014年の中央教育審議会答申で軸となっている学力の三要素は「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等の能力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」である[杉谷 2018:10]。

これまで述べたように、本科目において学生は講義を通して、「人を助ける」というテーマに沿ってリベラルアーツの特徴である非常に広い学問分野から多様な知識を獲得し、また読書レポート等を通じて、自分の問題意識や疑問から始まる「主体的な調べ学習」へと導かれ、独自の知識の獲得を進める。また、活動を通じてコミュニケーションや計画性などの技能を得ていく。また、現場で求められるのは経験したことのない状況での対応であり、自らの行動が相手や周囲との関係性を変えていくという現実世界であり、自ら考え、判断し、自分の意見を表現することを迫られる。そこでは、自らが「常識」と思っていたことが単なる「偏見」に過ぎず、自分で見聞したことを手掛かりに、自ら調べて一定の理解に辿り着きそれに基づいて行動しなければならない。それが正解なのかどうかは、容易には判断できず、授業内振り返りで自分の体験を精いっぱい言語化して共有し、同じ現場の他の学生の認識や行動を知る中で、自ら軌道修正をしなければならない。学生は既存の認知や行動パターンを激しく揺さぶられ、知識や他者の意見に耳を傾け、自らの意見を主張しなければならない状況を活動と振り返りの中で何度も体験する。通常のアクティブラーニングも同様であるが、サービスマーケティングでは非日常的な体験という非常に強いインパクトが加わるため、深い学習効果はあるが、学習管理の面では難しい点もある。

多様な人々との協働学習という点では、上記のように同じ団体で同種の体験をする仲間と違う団体で同種の体験をする仲間、さらに全く異なる活動内容の仲間という、通常のサービスマーケティングよりも多様性に富んだ協働学習の機会が提供されている。また、現場で出会う引き受け団体のスタッフの人々もある意味では協働学習者である。団体スタッフからはしばしば、外部の若い学生の意見から新しい視点や刺激を受けるという声を聞くことがある。また、支援を受ける人々もまた協働学習者である。単に労働力提供のボランティアではなく、一定の知的な課題を持って活動する学生は、知的刺激において引き受ける側にとっても協働学習者である可能性が高くなることが期待される。最後に、教員もまた振り返りの際などに出される多様な学生の意見や感想にどのようにコメントしていくのか、当然知らないことも多く、学生から学ぶことは多い。非常に難しい問題に学生がぶつかることも当然あり、教員が容易に答えを出せないこともしばしば起きる。そこでは、一緒に考えるという協働学習が自ずと生じてくるのである。

初年次教育にアクティブラーニングが導入されたのは、概ね2000年代以降であり、その背景には大学全入時代の到来と学生の多様化のなかで、学力や学習意欲の低下の問題があったとされる[菊地 2018:22]。講義や読書から得られる知識を現実とつなげて理解する想像力や難しい概念を理解する力、また多くの本を読破していく知的体力などに欠ける学生にとっては、常に現実と知識を往復するようなサービスマーケティングは非常に効果的な学習方法であると言えるだろう。この科目で課されるような種類の参考文献を内的動機によって読み終えて理解する機会は、多くの学生にとっては多くはないと思われる。しかし、その経験は、専門書の読書を通して知識を持って初めて現実が理解できるという体験によって、専門課程における主体的学習に展開する契機となっているのではないかと期待する。おそらくは、多くの受講生にとって初めて専門書を興味を持って読み通す経験ではないかと思われる。

また、菊地は大学での学びを社会生活へとつなげる教育として、「大学生にふさわしいより能動的・主体的な学び」としてのアクティブラーニングがあると述べている[菊地 2018:21]。サービス

3. 実践報告・実践研究論文

ラーニングはボランティアとはいえ、現実の社会の中で起きていることに関わる訳であり、教員がコントロールしている教室内のin vitro の体験ではなく、現実社会という教員がコントロールできず何が起きるか分からないin vivoでの学習である点から、より卒業後の社会人生活に近い学習体験であると言えるだろう。授業内でも、将来会社に入って仕事をするということになると体験することを今練習しているのだと繰り返し語り掛け、現場に入ったらどうにかしなければならぬという現実と直面するので、他人任せにせず、自ら調べ、考え、自分の意見を述べるというリベラルアーツ教育の意義があり、このような学習体験こそが、リベラルアーツ教育の強みだと印象付けている。

さらに菊地はアクティブラーニングの実現には、教職協働、さらにはそこに学生も加わって教職学協働の必要性を述べている[菊地 2018:26]。サービスマーケティングにおいては、さらに受け入れ団体のスタッフという社会人もまた協働に加わっており、教職学社協働である。それは、社会の実際の姿により近い協働であり、学生の学びはより深まるが、同時により多くの人々の協働をどのようにマネイジするかという難しい課題も生まれる。

多人数の学生と複数の引受先の間での連絡調整だけでも大変な手間であり、職員のサポートも初めに述べたように一定程度は必要である。また、将来的にはマッチングアプリのような学生の希望と引受先の都合をネット上で調整するようなデバイスが必要となると思われる。さらに、複数の教員によるティームティーチングもまた必要になるであろう。

(2) 多人数の多層的な気づきのマネジメント

初年次教育であって、特定の専門の学生の集まりではなく多様な興味関心と高校程度の基礎知識の受講生であること、多人数であって多くの引受先がなければ全員にボランティア活動の機会を与えられないこと、という現実の要請がある。そこで、本科目では社会問題に対応する団体で1か所に1～5名の学生がそれぞれ異なる体験をするという特異なサービスマーケティングの科目となっている。当然そこでは、受講生全員が同じ団体で活動をする授業とは異なる振り返りの手法、受講後の学びの方向性が出てくる。

上述のように、5つのフェーズで異なる組み合わせとディスカッション・テーマでの振り返りを行った。以下に、学習成果という観点で簡単にまとめてみる。

第1フェーズ（同じ団体で活動）：同じ現場での活動でも、自分の気づきと他者の気づきが異なるという点の理解（観察の多様性の認知）、他者からの学び（自己の認識の相対化）。

第2フェーズ（同じ種類の活動だが違う団体で活動）：同じ社会問題でも異なる現場の存在に気付く（個別事例から一般的現象への認識転換）、同じ問題への異なるアプローチへの気づき（現場での批判的視点の獲得）

第3フェーズ（違う種類の団体で活動：ボランティアのポジティブ面）：自分自身の内面を観察して他者に表現する（内面のポジティブな感情の外化）、他者の同種の感情を聞くことで自己の感情の受け入れと人による違いの認識（自己肯定と同時に自己の認識の相対化）

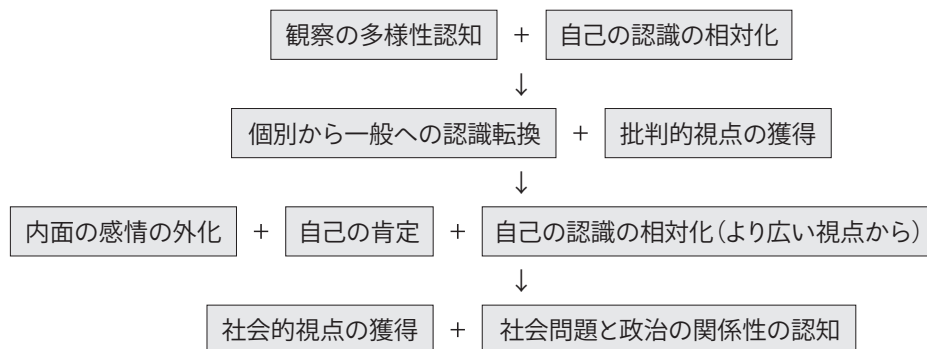
第4フェーズ（違う種類の団体で活動：ボランティアのネガティブ面）：自分自身の内面を観察して他者に表現する（内面のネガティブな感情の外化）、他者の同種の感情を聞くことで自己の感情の受け入れと人による違いの認識（自己肯定と同時に自己の認識の相対化）

第5フェーズ（違う種類の団体で活動：ボランティアの必要性和国民的支援の有無）：客観的に自分の活動の意義を考え（社会的視点の獲得）、社会問題の多様性と支援の不均質性、不公平の気づき（社会問題と政治の関係性）

上記をチャートにすると以下のようなになる。

3. 実践報告・実践研究論文

図1 振り返りの構造



振り返りは、主として「はじめに」で触れた、アスティンの学習成果の内面的情緒面につよく働きかけると考えられる。アスティンは、その成果は「価値、関心、自己概念、態度、信念、満足度」などとしてとらえられると述べている。上記の振り返りの構造の中では、「価値」「自己概念」「信念」といった成果に向けて、おそらく以下の二つの要素が働きかけると思われる。

第一は、様々な他者の認識を知ることで、自己の認識が揺さぶられ、認識が正しいのか迷う経験が何度か用意されていることである。その過程で、徐々に自己の認識が修正され（例えば、偏見に気づく、他者に学ぶなど）、より柔軟ではあるが安定した価値、自己概念（自分はどのような人間だ）、信念などが形成されるという要素である。しばしば偏見に満ちた安易な価値観は、一つの反例や反対意見で揺らぎ、自信喪失につながる。多くの受講生で多様な意見の存在の正当性が担保され、教員等のアドバイスがある環境下で、自己の認識の正当性が揺さぶられることは安定的な価値観の育成に繋がるだろうと思われる。

第二は、自己の内面的感情の他者に向けての表現である。ポジティブな感情の共有は、一定の価値観の共有体験であり、自己の感じ方の肯定感が増すという効果を生む。また、日常生活では抑制的になる否定的感情の言語化もまた、ある意味では肯定的感情の限界を知るうえで重要であり、他者との意見交換の中で過剰な否定的認識は抑制される。そもそも「価値」「自己概念」「信念」は絶対的なものではなく、過大と過少の間、そして絶対と相対の間でのバランスが重要である。道徳的な価値意識を表に出して他者と意見交換をする場面は限定的であり、ボランティアという本音と建て前をめぐっての賛否両論の課題について、体験に基づく偏見の少ない環境下での意見交換はバランスの取れた「価値」「自己概念」「信念」の形成に役立つと思われる。

「関心」「態度」「満足度」については、選択の幅の広い活動、社会的弱者との向き合い、新しい世界との出会いなどのボランティア活動そのものがもたらす効果が期待できるであろう。事実、期末レポートでも「いい経験だった」「楽しい授業であった」という声は多い。ただ、対象となる社会問題が異なり、活動の内容も異なるため、個人の選択やマッチングによって効果の程度はかなり異なると思われる。

(3) リベラルアーツの学び: 学生一人一人の社会体験から多様な学習志向へ

本科目の受講生はリベラルアーツの1年生で、受講した時点では専攻希望がまだはっきりしない学生もいる。受講後、2年生の後半から受講生は多くの専攻へと別れていく。本科目履修は、必ずしも特定の専門との繋がりを求めているものではなく、むしろより一般的なリベラルアーツ独自の学び、あるいは学士力や社会人での活用を意識したものである。学生の専攻の希望は、コミュニケーション

3. 実践報告・実践研究論文

や英語、心理学やメディアといった比較的希望者が多い専攻から、理系、社会学、国際関係、国際協力などと様々である。理系科目から国際関係論まで、ごく入門的ではあるが、それぞれの専門から「助け合い」に関連する内容を集めた授業であるが、受講生には学問紹介的な意味も意図している。それぞれの学問の中には様々な立場があり、論争もあるため、「助け合い」という切り口は必ずしも主流であるとは言えないかも知れない。しかし、本科目が自分の興味関心を見極めたり、あるいは学問の入り口の提供になることを期待している。

特定の専門を深く極めずに、表層的に学際性を論じて、単なるディレクタントの養成になりかねないという批判もあり得るだろう。しかしながら、特定の課題を設定して様々な学問分野の知識を動員して課題解決を考えるということが、リベラルアーツの学びであるという前提の下で本科目は構想されている。この科目ではリベラルアーツの学びの一つのモデルを学生に提示したと筆者は考えている。専門課程に進んだのちに、例えば卒業論文などで、チャレンジングな課題解決型のテーマ設定や他の学問分野の知識の活用などのリベラルアーツで期待される学びの方向へと果たして進んでくれることを期待するが、実際にどうなのかは、調査できていない。「学問の基礎」という基礎教育科目自体が、実験的な要素を含んでおり、学際的な学びを単一の科目で実現することは可能なのか、あるいは好ましいのかの確証はない。初年次教育と専門教育の接続をどう設定するのかは、リベラルアーツ教育のカリキュラム全体とも関連しており、一科目の中だけでは判断しにくい問題である。

多様な教室外活動の一例 —コロナ禍での家庭内ボランティア活動

本科目では、講義のいくつもの部分からサービスマーケティングに繋げることが可能である。これまで述べてきた活動は、講義における社会レベルでの助け合いを理解するために、社会問題に取り組む諸団体においての活動であった。2020年度はコロナ禍のためこうした社会活動が不可能となり、従来とは異なるサービスマーケティングを実施した。

講義の「家族の助け合い」の部分でのサービスマーケティングとして、家庭内での再生産労働（家事・育児・介護・地域活動など）の家族間の分業を調べ、主として担当している人（母親の場合が多い）と話し合っ、その一部を肩代わりする家庭内ボランティア活動を課した。一人暮らしの場合には、故郷の保護者と相談して、一人暮らしの中で再生産労働をすることで、実家で暮らしていた頃の不平等を体感することとした。

大学1年生の場合、例外もあるものの、再生産労働については本人の分担が非常に限定的であることが多く、主として担当している家族メンバーに対して不公平となっていることに気づくことが第一の狙いである。ボランティア活動が却って迷惑になるといけないため、必ず主として担っているメンバーと相談して了解を得ることし、ボランティア活動の報告書にはその人の確認の署名と感想を書いてもらうこととした。

報告書では、普段から分担しているという例外的学生もいたが、多くはそれまで分担していなかったことで、大いに家庭内での不公平が存在し、それは将来的には家族関係の危機に繋がるかも知れないという認識をもった学生が多かった。また、主として担当している家族（母親が中心）のこのボランティア活動への反応は好意的で、これを契機に授業後も分担して欲しいという声が多かった。さらに、一部の学生は自分が負担するだけでなく、他の家族（父親やきょうだい）とも話し合っ、より公平な分担を決めたとする学生もいた。

家庭内での再生産労働が女性に大きく偏っていることは、言うまでもなく日本のジェンダー不平等の大きな原因の一つであり、女性の社会参加が進まず、経済的不平等にもつながる大きな国家的問題であり、ジェンダーギャップ指数で日本が圧倒的に低く評価されている原因にもなっている。「身近なことの中に政治がある」ということの典型であり、そこに学生が気づくことは「社会問題は見えない」という気づきと、自分が見ようとしなかったという認識を持たせる、非常に分かりやすい事例に

3. 実践報告・実践研究論文

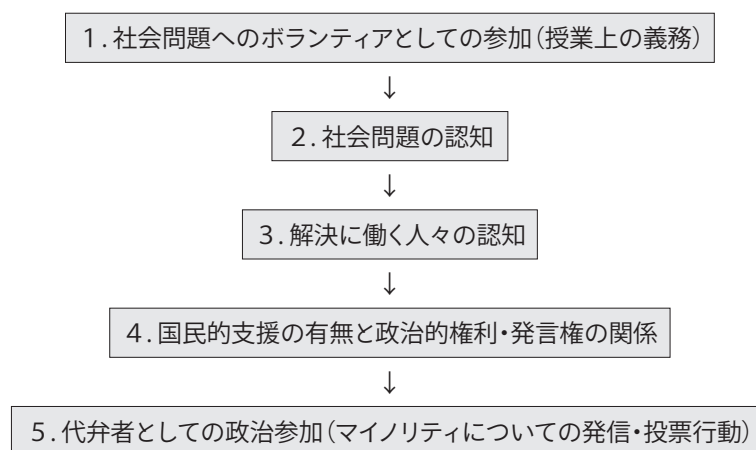
なった。

学生へのインパクトの大きさは予想以上であったが、従来の社会レベルの活動に比べると、発展性に乏しい面があり、全面的に家庭内ボランティアにしてしまうことはないと思うが、例えば何らかの事情でボランティア活動が難しい学生（障がい等）については、家庭内ボランティアもあり得る選択肢だと思う。

(4) 社会問題への気づきから市民教育への導入

サービスマーケティングの一つの目的として市民教育が言われている。市民教育の要素はいろいろ考えられるが、「市民意識」「社会問題への関心と関与」「政治意識」「政治参加」などがキーワードとなるであろう。本科目では、以下のようなプロセスを想定していた。

図2 市民教育への導入の行程



上記の1～3はボランティア活動がある程度行えば気づくことであるが、多くの学生は話しには聞いていても実際に当事者に接したことがないことが多く新しい経験である場合が多い。また、偏見を持っていたことに気づくのである。解決のために働く人々が、行政的支援の下での有給スタッフなのか、それが全くないボランティアなのかの見分けは全体を見ていない学生には難しく、教員の情報提供と問いかけ（何故、違いがあるのか）が必要である。講義では、税や保険料などの強制的徴収に基づく国民的助け合いについて話す、税や保険料が助け合いなのだという認識はほとんどの学生にはない。納税等を実生活でしていないからである。講義ではそこは深掘せずに、国家間の協力の話しに進んで行くため、政治参加の部分は振り返りの部分での教員の働きかけで終わる。

期末レポートでは、何を学んだかという問いに対して、社会問題の存在とその解決の必要性を述べる学生が多く、一部は今後も他の社会問題にも関心を持ちたいと述べている。しかしながら、十分な政治参加意識にまで達することが出来たかという疑問が残る。例えば、最低限の行動変容である国政選挙での投票行動にまでつなげることが出来ればと考える。学生はSNSでの発信が得意であるため、関わった社会問題についてのSNS発信を課題にすることも考えられるが、否定的な反応で傷つく危険性もある。

以上のように、市民教育をサービスマーケティングの中で位置づける試みを行ってはいるが、まだ発展途上であると言うべきである。

3. 実践報告・実践研究論文

4. おわりに

「学問の基礎」の科目設定が、リベラルアーツらしい学際的な学問のあり方を学生にどのように提示するのか、という学群全体の話し合いの中から出てきた、ある意味では実験的な試みである。リベラルアーツとは何かについて、筆者なりの理解は次のようなものである。それは現実の問題や課題に様々な学問の知識を用いて、現場から発想して解決を考えるということである。リベラルアーツの1年生の時に、現場に入って問題を知り、関連の知識を自分で探し、他者の意見を聞き、自分なりの答えを考える。この一連の体験をしてもらうことが、リベラルアーツの初年次科目として適切ではないかと考えた。そうだとすれば、サービスマーケティングの学びはまさにぴったりではないかと考え、この科目を構想したのである。

サービスマーケティング科目として実施する場合、最も難しい課題は、多くの受講生がいた場合、どのように多数の学校外活動を用意するかであり、多様な場所での活動体験をどのような振り返りに結び付け、どのような学習志向に繋げていくのかである。筆者なりの答えは既に述べたとおりであるが、リベラルアーツであることから受講後の学習志向は多様にならざるを得ないし、それがむしろ望ましいであろう。一方で、本科目の学習目標の共通の志向性として、政治意識を含む市民教育を設定してみた。結論から言えば、多くの活動場所の確保、多様な体験に基づく振り返りについては、一定の成果を得たと思うが、実施上のいくつかの課題、例えば、団体と学生のマッチングに非常に手間と時間がかかることなどが明確となった。また、政治意識の覚醒については、1学期の2単位科目でどこまで到達できるのかは難しい課題であると感じている。

筆者は、この科目をサービスマーケティングの実験として実施したともいえるかも知れない。成果もあり、課題も見えた。課題は一つの科目内での解決は難しく、マッチングアプリ開発のような大学的対応、およびリベラルアーツのカリキュラムの中にサービスマーケティングを位置付け、段階的にステップアップしていくことが肝要ではないかと考える。

【参考文献】

- アクセルロッドR、松田裕之訳 (1998) 『つきあい方の科学 バクテリアから国際関係まで』ミネルヴァ書房
 安藤寿康 (2012) 『遺伝子の不都合な真実』ちくま書房
 岩井克人 (1998) 『貨幣論』筑摩書房
 ヴァール、フランス・ドゥ、西田利貞・藤井留美訳 (1998) 『利己的なサル、他人をおもいやるサル—モラルはなぜ生まれたのか』草思社
 ヴァール、フランス・ドゥ、柴田裕之・西田利貞訳 (2010) 『共感の時代—動物行動学が教えてくれること』岩波書店
 内山節 (1997) 『貨幣の思想史』新潮選書
 小原嘉明 (2017) 『イヴの乳 動物行動学から見た子育ての進化と変遷』東京書籍
 オルニィ、シャウナL. (1999) 『変化する世界と労働組合』社会文化協会
 柏木恵子編 (1998) 『結婚・家族の心理学』ミネルヴァ書房
 柏木恵子編著 (2010) 『よくわかる家族心理学』ミネルヴァ書房
 川口清史他編 (2005) 『よくわかるNPO・ボランティア』ミネルヴァ書房
 菊地慈夫 (2018) 「2章 初年次教育と小中高の取り組み—多様性を生かすアクティブラーニングの可能性」
 初年次教育学会編『進化する初年次教育』世界思想社

3. 実践報告・実践研究論文

- 熊沢誠 (2013) 『労働組合運動とはなにか』 岩波書店
- 菅野純 (2003) 『反省的家族論 カウンセラーが語る「私」の原体験』 実務教育出版
- 杉谷祐美子 (2018) 「1章 初年次教育研究の動向と課題—初年次教育学会における研究活動を中心に」 初年次教育学会編『進化する初年次教育』 世界思想社
- 田村正勝 (2009) 『ボランティア論』 ミネルヴァ書房
- ドーキンス、リチャード、日高敏孝・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳 (2006) 『利己的な遺伝子』 紀伊国屋書店
- 牧田東一 (2012) 『国際協力のレッスン～地球市民の国際協力入門』 学陽書房
- 諸富徹 (2013) 『私たちはなぜ税金を納めるのか』 新潮選書
- 山田礼子 (2019) 『2040年 大学教育の展望—21世紀型学習成果をベースに』 東信堂
- 芳沢光雄 (2018) 『リベラルアーツの学び 理系的思考のすすめ』 岩波ジュニア新書